

放送大学客員教授 深谷昌志

● 目次

本報告書の要約	2
第I章 変わりゆく家族の風景	4
1. 父性と母性との分離	4
2. パートナー型の親たち	5
3. パートナー夫婦の功罪	6
第II章 どのような父親・母親なのか	9
1. 親たちの自己像	9
2. 子どもたちの両親像	12
第III章 仲むつまじい親子を支える状況	21
1. 子どものことを知っているか	21
2. いつまで子どもを注意するか	25
3. 親との関係はうまくいっているか	29
4. 異性とのつきあい方	32
第IV章 親子関係の未来	35
1. 子どもへの満足	35
2. 将来性についての見通し	39
3. 高校への注文	43
4. 親は家庭作りのモデルになるか	47
まとめに代えて	50
資料1 調査票見本(高校生)	51
資料2 学年・性別集計表(高校生)	61
資料3 調査票見本および集計結果(親)	74

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

本報告書の要約



① 親たちの自己評価

父親と母親はともに、仕事熱心であたたかい親という自己像を抱いている (P.12図5)。

② 親たちへの評価

子どもたちは、父親そして母親ともに頼りになり、やさしいというイメージを抱いている。そうした中で、仕事熱心な父、あたたかい母という開きも認められる (P.18図11)。

③ 子どものことを知っているか

担任の先生の名前や学校の成績など、母親たちは子どものことを、子どもが思っている以上に知っていた (P.24図15)。

④ いつまで注意しているか

高校生になっても、多くの親たちは、部屋の掃除や長電話など、子どもたちに注意をしている (P.27表3)。

⑤ 親との関係はうまくいっているか

子どもたちは、子どもの頃から現在まで、そして、現在から将来についても、うまくいっているという (P.30図19)。そして、親たちも、子どもとの関係はうまくいっていると答えている (P.31図20)。

⑥ 子どもに満足しているか

親たちは、子どもの学業成績や将来性について、あまり満足せず、多少の不満を感じている (P.38図25)。

⑦ 将来についての見通し

子どもも親も、将来、幸せな家庭を作り、仕事で成功し、よい親になるのは可能だろうと思っている (P.41図26)。

⑧ どこまで家庭で担うか

健康管理やあいさつ、言葉遣いなどの指導は、主として家庭が担うべきだという親たちが多い (P.45図29)。

⑨ 親のような家庭を作りたいか

「やや」の33.8%を含めると、66.6%と、ほぼ3分の2が、親のような家庭を作りたいという (P.48表15)。

⑩ どんな家庭を作りたいか

郊外の一戸建てで、2人の子どもののびのびと自由に育てたい (P.48図30)。

〔調査概要〕

対象 ● 鹿児島県、長崎県、奈良県、福島県、東京都の高校1年～3年の生徒1,626名とその親1,014名

時期 ● 1990年4月～5月

方法 ● 学校通しによる質問紙調査

サンプル構成 (人)

学年	性別		計
	男子	女子	
1年	158	348	506
2年	272	654	926
3年	114	80	194
計	544	1,082	1,626

第 I 章 変わりゆく家族の風景



1. 父性と母性との分離

研究者たちが家族について語る時、タネ本、といって悪ければ、よりどころとする本の一冊に、アメリカの社会学者・パーソンズの『核家族と子どもの社会化』（黎明書房）がある。

この本の中でパーソンズは、父親の役割を「道具的」、母親を「表出的」と名づけている。専門用語なのでわかりにくい部分があるが、つきつめていうと、「道具的」とは社会的な目標へ向けて子どもたちをかりたてる「引っぱり型」の役割であるのに対し、子どもの気持ちを理解して、あたたかく保護する「なだめ型」が表出的となる。

つまり、子どもたちを社会的な達成へ向け

て引っぱるのが父性、そして、子どもたちの精神を安定させてなだめるのが母性というところである。

パーソンズとともに、ユングの家族論も引用されることが多い。河合隼雄氏の『母性社会日本の病理』（中央公論社）でも知られているとおり、ユングは父性＝切る、母性＝包むとしてとらえている。優劣のけじめをはっきりさせて切るのが父性であるのに対し、けじめをはっきりさせず、むしろ敗者や劣者の気持ちを大事にし包みこむのが母性だという把握である。

くわしい説明は省略することにするが、このパーソンズやユングに限らず、これまでの

家族論では父性と母性を分離し、厳父慈母のように、厳しさや権威、そして社会的な達成を父親に関連させる。そしてやさしさやあ

たかさ、甘えなどを母親の属性とみる場合が多かった。つまり、父親と母親とを対比させてとらえているのである。

2. パートナー型の親たち

しかし、実際の家族はもう少し急速な変貌を示しつつある。具体例をあげてみよう。図1は、本モノグラフの「中学生の世界」からの引用で、中学生たちに自分の両親についてのイメージをたずねたものだが、父親と母親のイメージがほぼ同じようであるのが興味深い。

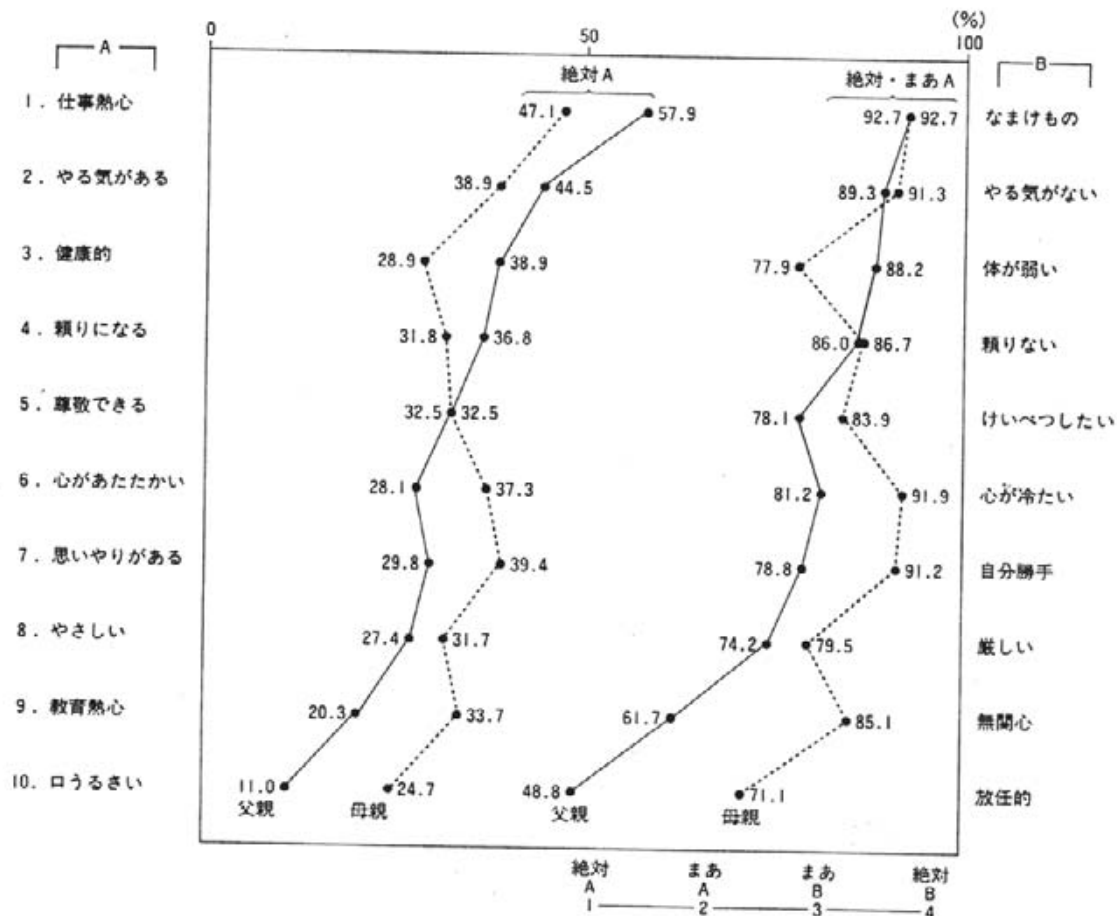
父も母もともに尊敬できるし頼りになるが、

そうした中であたたかさや思いやりがやや多いのが母、そして健康的で仕事熱心なのが父という評価である。

このように、図1を手がかりとするならばやさしさ=母、やる気=父というような両親像が、少なくとも日本では現実離れしているのが十分に理解できよう。そして、この図1に限らず対象を変えて、何回か調査を繰り返

図1 父・母のイメージ (中学生)

——共通性をふまえて、健康的な父、口うるさい母——



したが、両親の同質化を示す結果が得られるのは共通していた。

父親たちが人間的なやさしさを見せ始め、それと対照的に母親たちが知的な面をもつようになった。その結果、父親と母親との同質化が進んでいる。

考えてみると性に伴う差別が解消されるようになり、女性も男性と同じように社会進出をするのが可能になった。そして男女とも同一レベルの教育を受け、男性と対等の立場で仕事をする女性が増加している。さらに、情報化社会は性差に関係なく、どの人にも情報を提供してくれるなどの状況を考慮すると、母親たちの知的レベルは父親と同じ、あるいはそれ以上になるのは、社会の流れにそった

ものように思われる。

そうした一方で平和が続いて男性的な力を必要としなくなった。また、技術革新が進み仕事をするのに筋肉の強さを求められなくなった。さらに民主的な家庭生活の中で父親だけ特権をもつのはふさわしくないなど、父親が厳しさをやわらげ、人間的な感覚を強めていく傾向は今後も持続していこう。

したがって現在の世の中での動きが続く限り、父親はますます人間味を増し、そして母親が知性を加える傾向は強まることはあっても、それが逆行することはないように考えられる。ということは、父と母とがともに頼もしく、かつやさしいというパートナー型の夫婦が、これからますます増加してくる。

3. パートナー夫婦の功罪

このところ家事を手伝う、というより積極的に家事に参加する男性が増加している。そうした一方、これまで男性だけが従事していた仕事へ進出する女性が目につく。

社会的にみても性差の縮小は著しいが、現代の小中学生の親たちは、完全な戦後生まれで、いわば、戦後の民主主義の中から育ってきた。それだけに家制度の名残をとどめるそれ以前の夫婦たちとかなり異質の家を作ってもおかしくはない。

それが、夫と妻とが二人三脚をする形で子育てを行うパートナー型の姿なのだが、中学生たちは父と母との助言の役立ち度を以下のように評価している。

	母親	父親
① 卒業後の進路	60.8%	≒58.7%
② 進学高校の決定	59.9%	>54.7%
③ 勤め先の決定	57.9%	<64.0%
④ 結婚相手の決定	45.5%	>31.5%

(「とても」「かなり」役立つ割合)

このように中学生たちは親のアドバイスがかなり役立つと思っているが、そうした中で

母親のアドバイスにかなり信頼を寄せていることが明らかで、こうした面にもパートナー型の夫婦の一端が表れている。

そして、パートナー型夫婦の場合、父母がともにやさしく、かつ、頼もしいので子どもにとって親が理想的のように思える。

実際に表1に示したとおり、中学生たちは母親の体力は越したと思うが、その他の面では親の力のほうが自分よりはるかに上だと思っている。

子どもたちは、父、そして母にビッグなイメージを抱いている。しかし親たちは自分たちが子どもの目にそんなにビッグに写っているとは思っていないので、子どもたちのまなざしに気づいていない。

ところが図2に一例を示したように、母親自身が思っているよりはるかに現代の親は子どもにとって大きな存在になりつつある。

もちろん親がビッグでもかまわない。しかし、ビッグでありすぎると子どもたちは親を越える意欲をもてなくなり、反抗する気持ちが薄れてくる。

長い間、中学生から高校生にかけて嵐のような反抗をするのが子どもであった。しかし、この15年来そうした反抗は姿を消し、15歳から10年間くらいかけてなだらかに反抗する、新しいスタイルが生まれつつある。

あまりにビッグな親の姿に押しつぶされる子どもたちである。このようにパートナー型の親は安定しているので、子どもたちは安心して依存できる。したがって幼児期や児童期の親としては、パートナー型は望ましい。

しかし、皮肉なことにビッグな親は子ども

の自立の妨げとなる。したがって、パートナー型の親は従順で素直でおとなしい子どもを育てるのには適している。しかし、意欲を燃やして自主的に行動する子どもはパートナー型から育ちにくいように思う。

これまで、中学生を対象とした親子関係の調査結果を概観してきた。それでは、高校生についても同じような傾向を指摘できるのだろうか。以下、高校生についての調査結果を紹介することにしたい。

表1 父・母を越えそうか (中学生)

——とても越えにくい——

(%)

	母 親 を			父 親 を			割 合 (B/A)
	越えた	中学まで	小計(A)	越えた	中学まで	小計(B)	
1. 体力	56.5	24.8	81.3	12.8	24.2	37.0	45.5
2. がんばる力	7.2	23.8	31.0	4.5	25.6	30.1	97.1
3. 算数や数学の力	16.1	20.5	36.6	8.6	18.1	26.7	73.0
4. 国語力	7.4	22.3	29.7	2.2	12.4	14.6	49.2
5. 人とのつきあい方	6.3	17.6	23.9	6.8	14.0	20.8	87.0
6. お金をかせぐ力	2.8	8.3	11.1	3.7	2.8	6.5	58.6
7. 社会の見方	2.7	13.1	15.8	1.4	6.4	7.8	49.4

もう
お母さんを
越えたと
思う

今は無理だが、いずれ越えると思う

中学を
終える頃

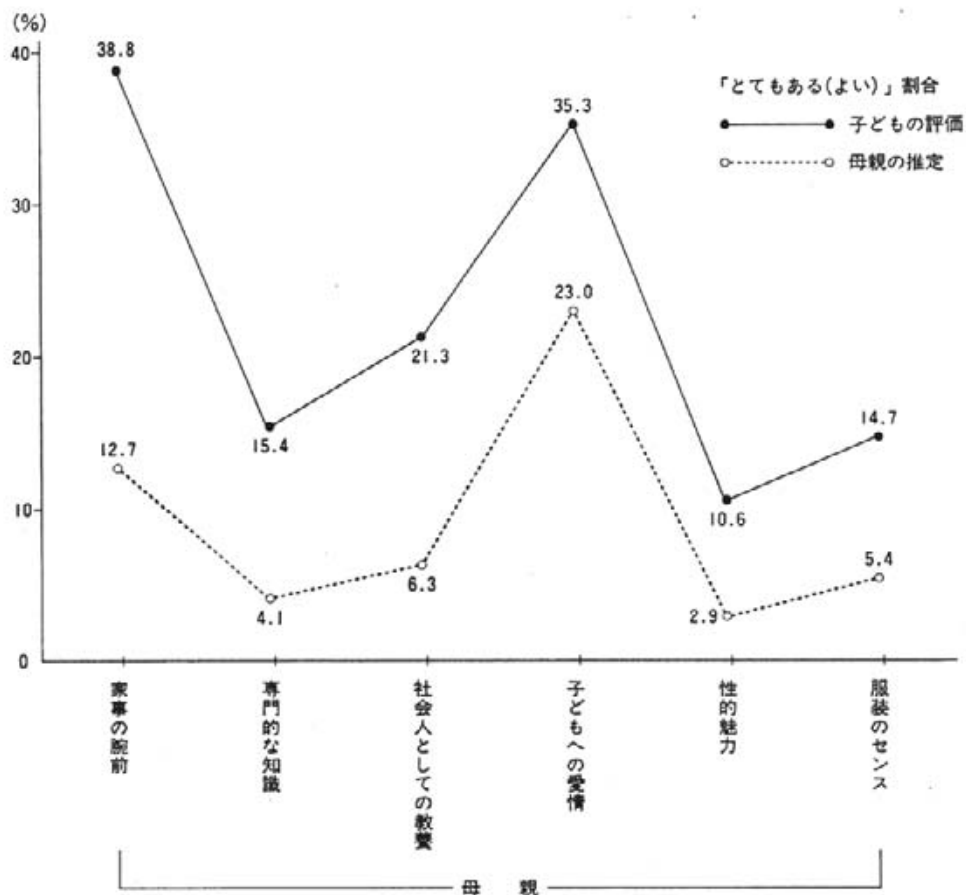
高校を
出る頃

大学を
出る頃

いつまで
たっても
越えられ
ないだろう

図2 子どもの母評価と親自身の自己評価

——子どもは親を高く評価——



第II章 どのような父親・母親なのか



1. 親たちの自己像

それでは、生徒たちは、父や母にどのようなイメージを抱いているのか。その前に、親たち自身が、自分の父親あるいは母親ぶりを、どう評価しているのでしょうか。

図3は、父親たちの自己評価を示している。仕事熱心——「かなり」を含めると76.4%——で、思いやりがあり(59.4%)、やさしく(59.0%)、家族から信頼されている(54.3%)つもりだという。

父親の権威が揺らいでいるといわれる。しかし、図3の結果では、父親たちが、自分の父親ぶりに自信を抱いているのがわかる。それと同時に、仕事熱心や頼りになるといった父的な役割と同時に、やさしい、あたたかい

などの母的な役割——といわれてきた——特性についても、父親たちが自信を抱いているのが注目をひく。

また図4は、母親たちの自己評価だが、ここでも、「とても」とはいわないものの、「かなり」を含めると、健康的で思いやりがあり、そして仕事熱心と、母親たちが考えているのがわかる。

このように、父親、そして母親は、ともに自分に自信を持っているのが印象的だった。それと同時に、父は厳しく、母はやさしい、というような伝統的な両親像が崩れていることを感じた。

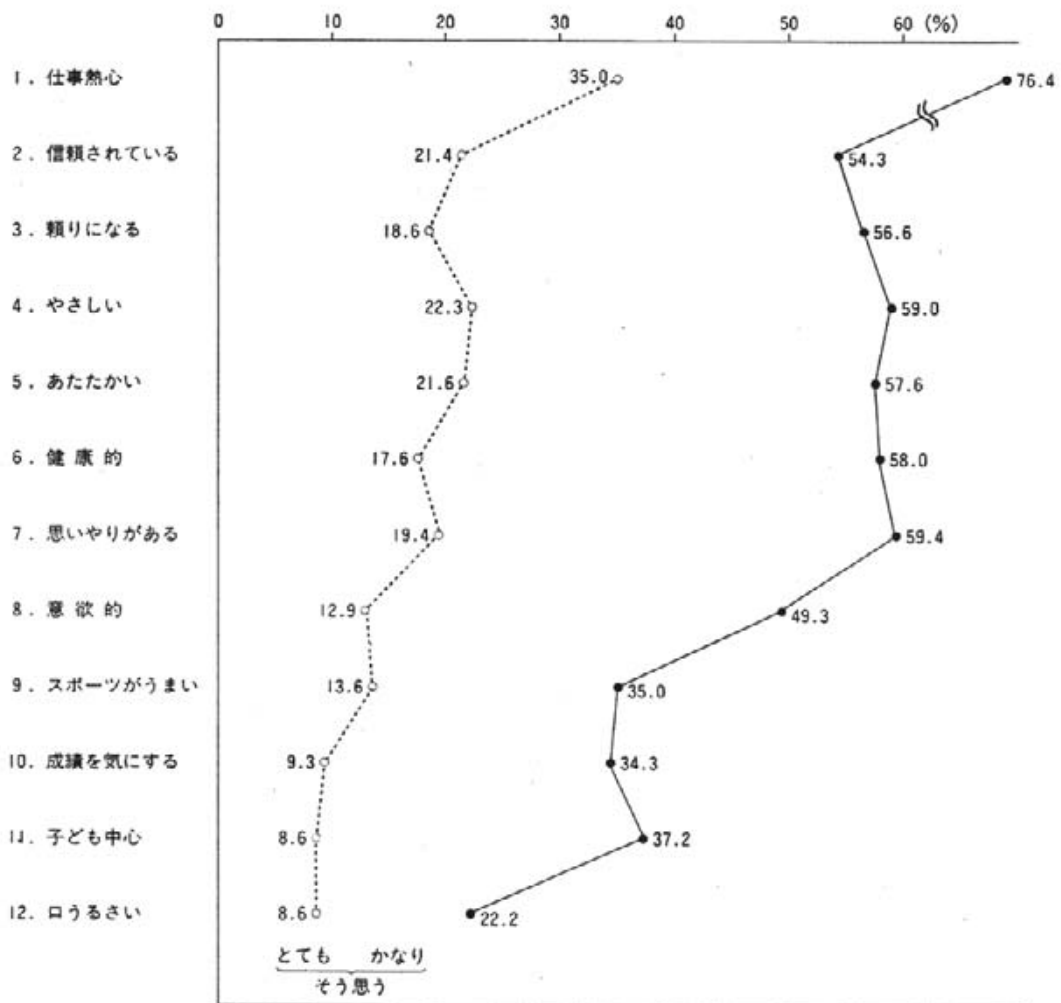
そこで父と母の自己評価をひとつにまとめ

てみると、図5のとおりとなる。プロフィールから明らかなように、父と母の自己評価は、ともにほぼ同じようなプロフィールを描いている。念のために、自己評価の高いほうから順に5位まで列挙してみよう。

	父親	母親 (%)
1位	仕事熱心 35.0	仕事熱心 27.0
2位	やさしい 22.3	健康的 22.6
3位	あたたかい 21.6	思いやりがある 19.7

図3 父親のタイプ (父親)

——かなりよい父のつもり——



4位	信頼されている	信頼されている
	21.4	19.0
5位	思いやりがある	あたたかい
	19.4	18.8

父親も、そして母親も、ともに仕事熱心で

あたたかいという自己像を抱いている。
 高校生の親としては、自己イメージが明るすぎる気持ちがするが、問題となるのは、こうした自己評価が子どもの親への評価とどう関連しているかであろう。

図4 母親のタイプ (母親)

——かなりあたたかく健康的なつもり——

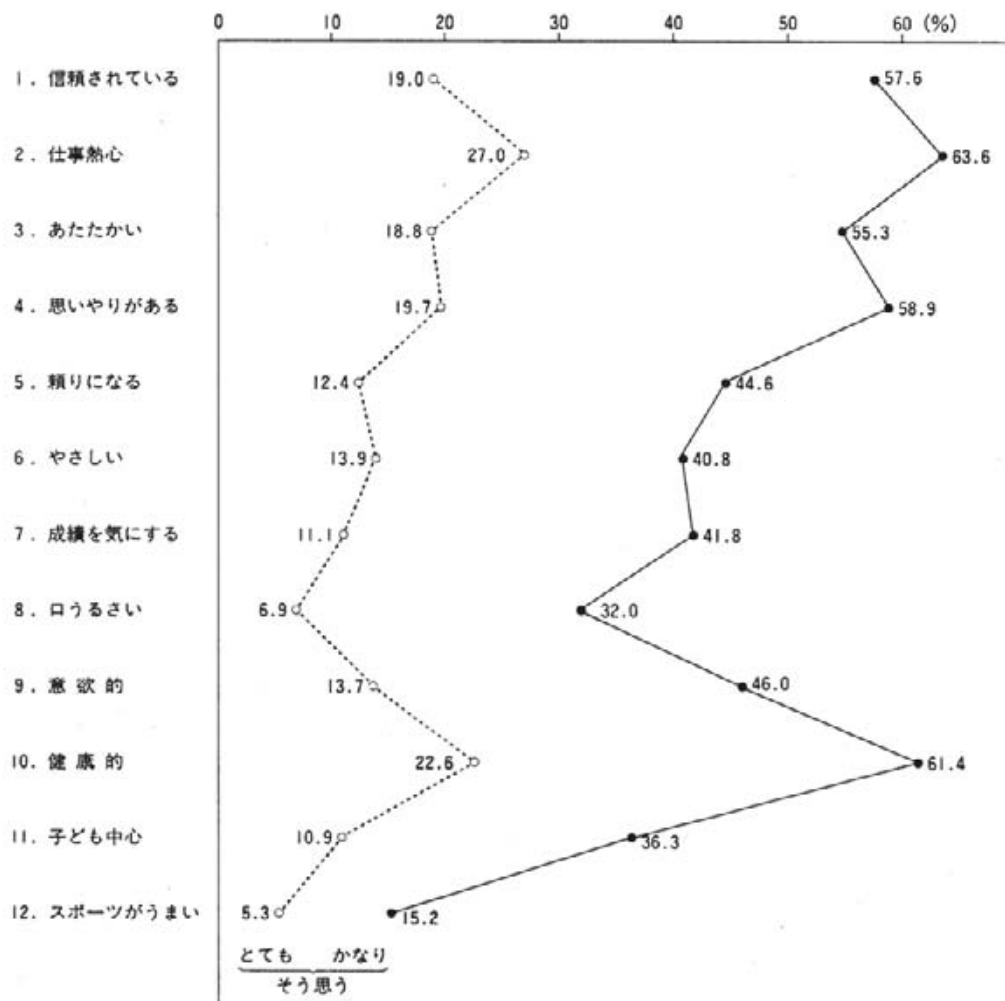
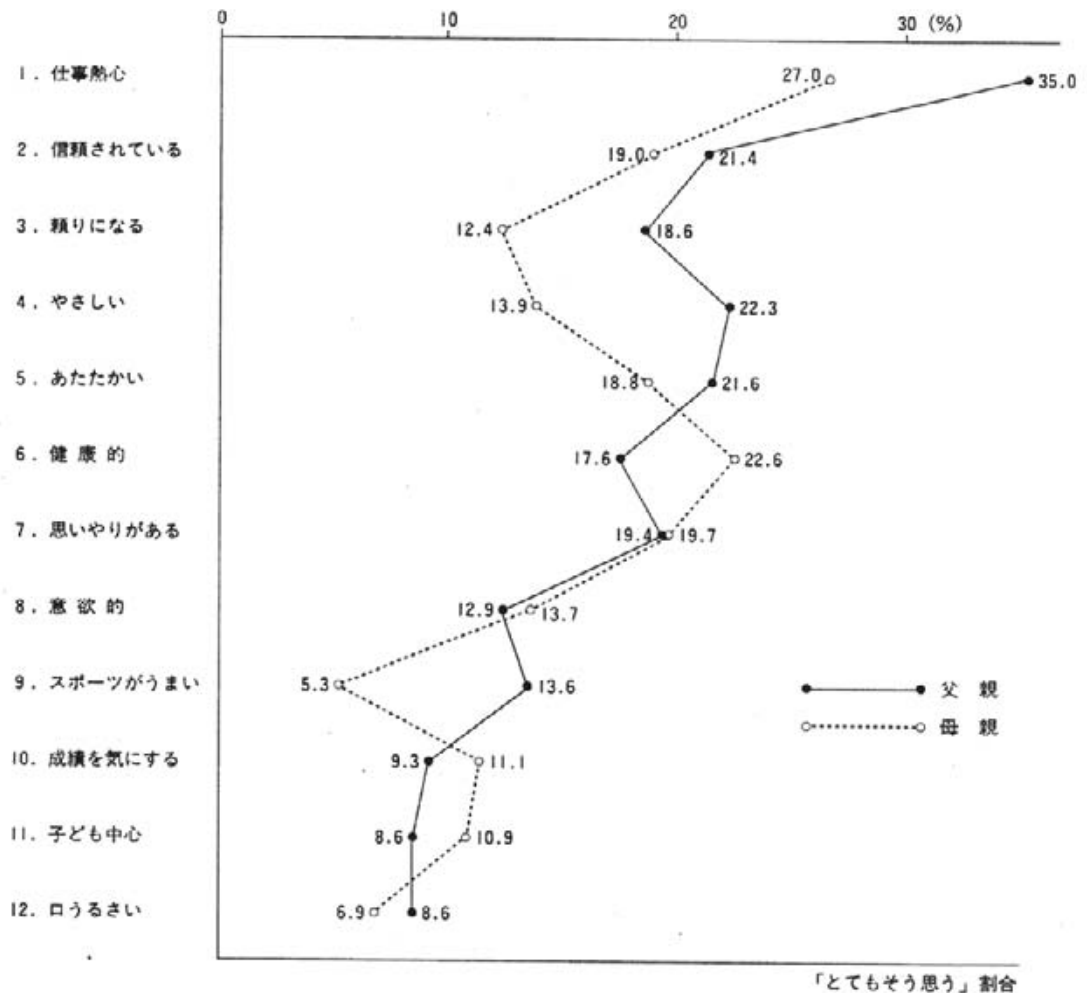


図5 父と母の自己評価

——父のほうが自己評価が高い——



2. 子どもたちの両親像

それでは、子どもたちは親にどのようなイメージを抱いているのか。まず、父親についてのデータを紹介してみよう。

図6は、父親のタイプについての評価だが、子どもたちは、自分の父親を、仕事熱心で、家族から信頼されており、頼りになる存在として認めている。

そうした意味で、図6の結果は、すでに紹介した父親自身の自己評価と、ほぼ同じプロフィールを示している。そして、全体としてみると、子どもの父親像は、信頼できるうえにやさしいというのであるから、よい父親と子どもたちが評価しているのを示している。もっとも、子どもたちの父親評価を学年を追

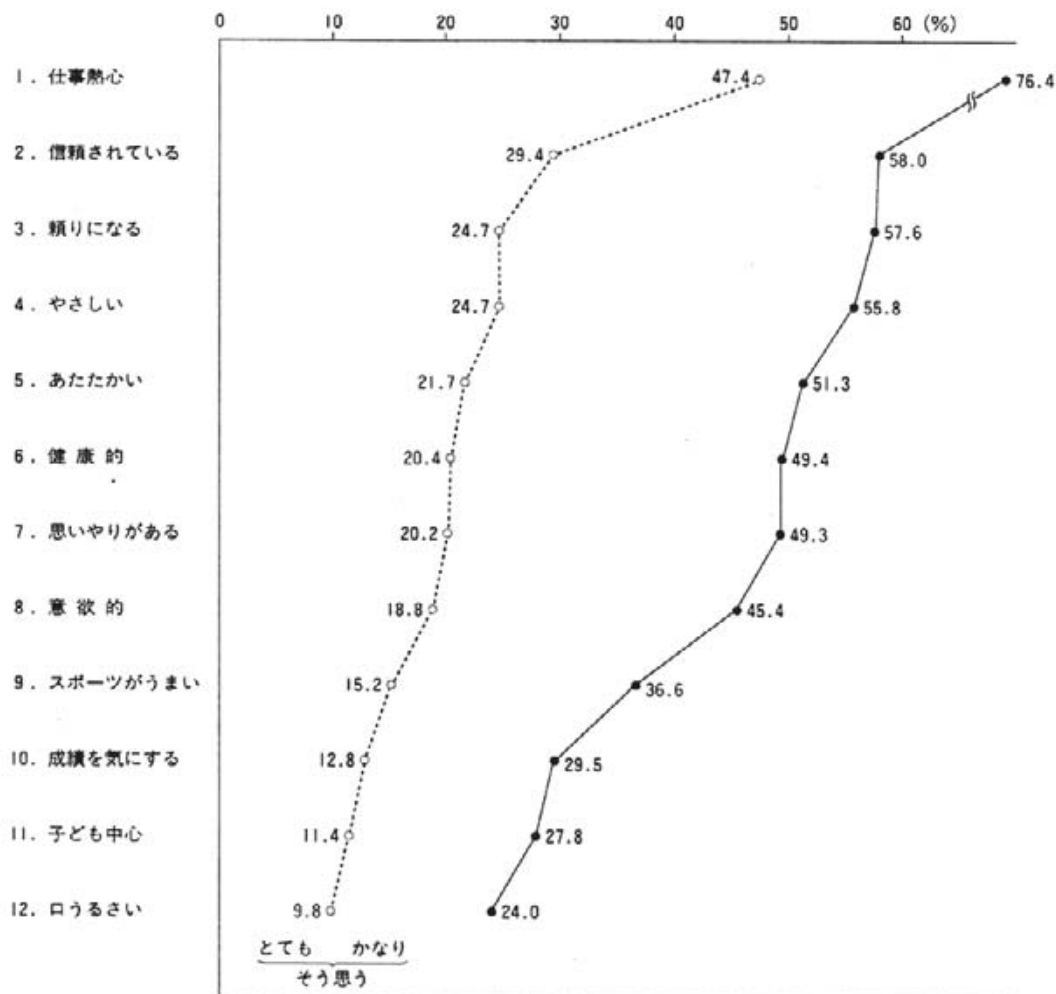
う形でまとめてみると(図7)、学年が上がるにつれて、さすがに父親評価が低下する傾向が認められる。しかし、男女別に集計した結果では、息子、そして娘から、ともに仕事熱心で頼りになり、やさしい存在として父親が認められているのがわかる(図8)。

高校生といえば、父親との関係が最も冷たさを増す年頃であろう。それにしても、高校生たちの父親像が好意的な感じがしないでもないが、母親についての評価はどうか。

図9に子どもたちが自分の母親をどうみているのかを示した。数値の高いほうから順に数値を拾うと、家族から信頼され、仕事熱心であたたかく、思いやりがあるという。高校生の母親評価にしては、好意的にすぎる感じがしないでもないが、図10によると、母親に対し、息子たちよりも、娘のほうが高い評価を与えている。娘のほうが、母親の気持ちがわかり、母親があたたかく思いやりがあり、頼りになると思えるのであろうか。

図6 父親のタイプ(子ども)

——仕事熱心で信頼されている——



そうした開きがあるにせよ、子どもたちの父親、そして母親評価は好意的で、親たちを心の底からよい親と思っている感じがする。そして、こうした傾向はすでに紹介した親たちの自己評価が誇張でないことを示している。

このように子どもたちの抱く両親像が、信頼でき頼りになるのはすでに述べたとおりだが、父親と母親に対する評価の開きをひとつ

にまとめると図11のような結果となる。

父親と母親は、ともにやさしく、そして頼りになるが、そうした共通性をふまえたうえで、父親と母親の特性として、以下のような傾向が認められる。

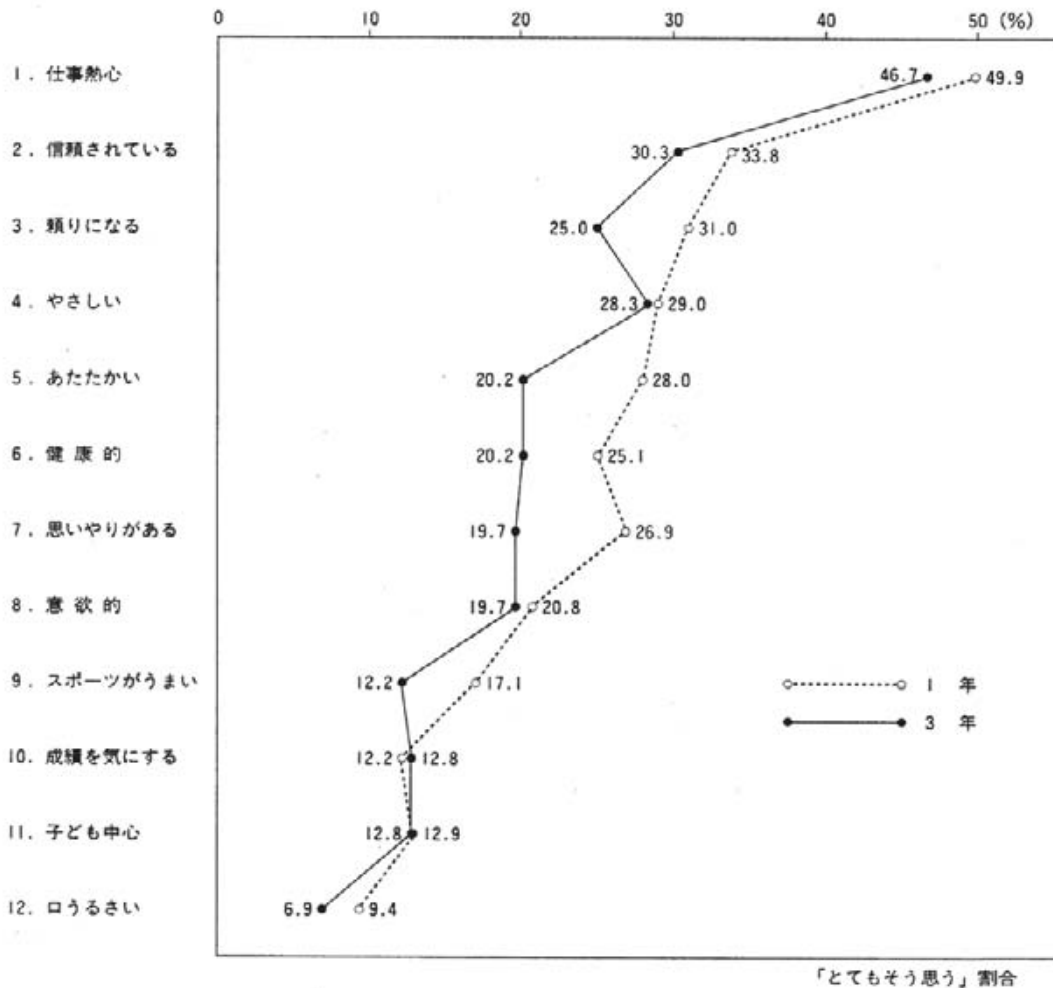
父親＝仕事熱心

母親＝あたたかく、思いやりがある

しかし、そうした開きは予想されたほどに

図7 父親のタイプ×学年

—— 学年が上がるとやや低下 ——



大きくなく、子どもたち——といっても高校生だが——は、父親、そして母親に信頼を寄せている姿が印象的だった。

念のために、子どもたちの親への評価と、親自身の自己評価とを対比させてまとめてみると、図12のように、父親と子どもの場合、プロフィールがほぼ一致している。しかし、母親については子どもたちの評価のほうが、

母親自身の評価を上回っている。母親たちは控え目で、自分を低く見積もっているのであろうが、いずれにせよ、子どもたちは、母親自身が思っている以上に、信頼でき、そしてあたたかいとみなしている(図13)。

したがって、冒頭で紹介した親たちの自己評価は、決して誇張したものでなく、むしろ控え目のデータのように思われてくる。

図8 父親のタイプ×性別

——ほぼ同じイメージ——

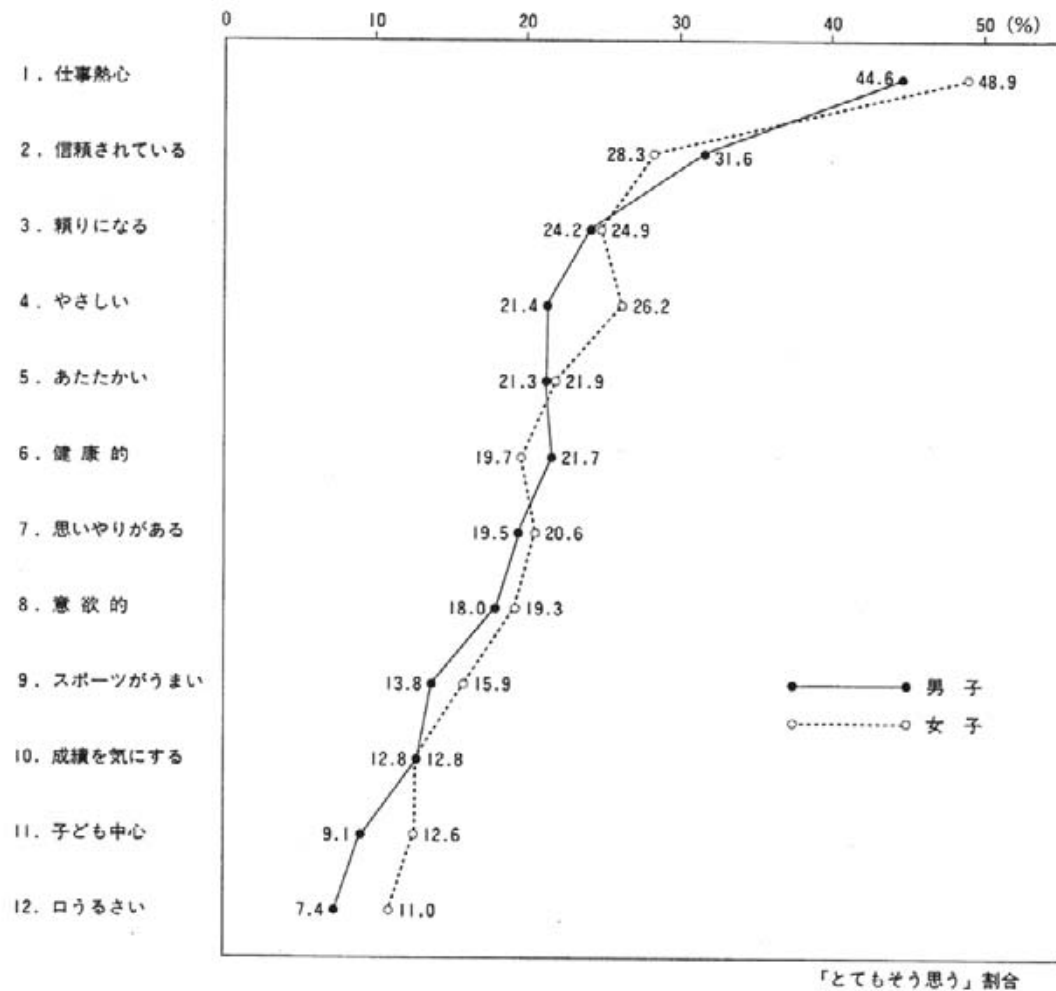


図9 母親のタイプ (子ども)

—信頼されているし、あたたかい—

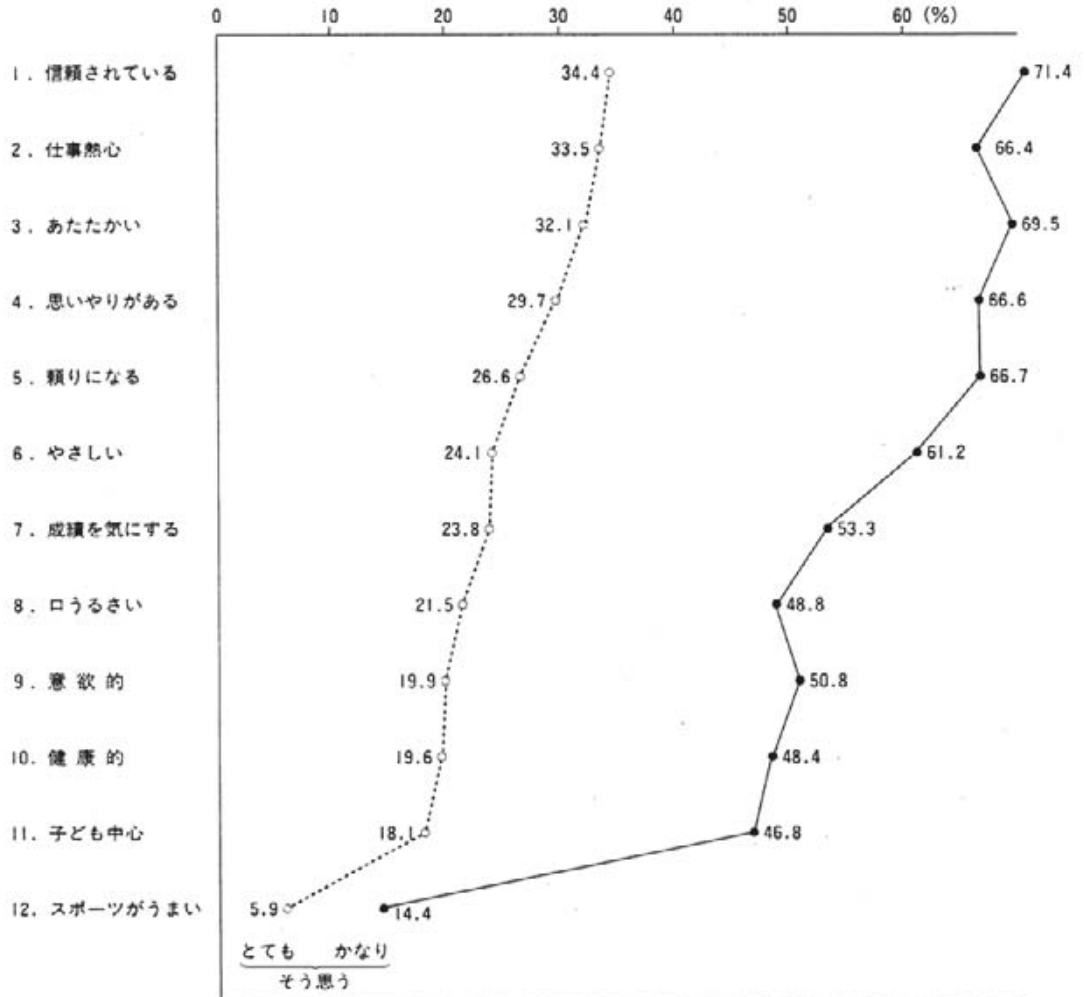


図10 母親のタイプ×性別

——女の子は高い評価——

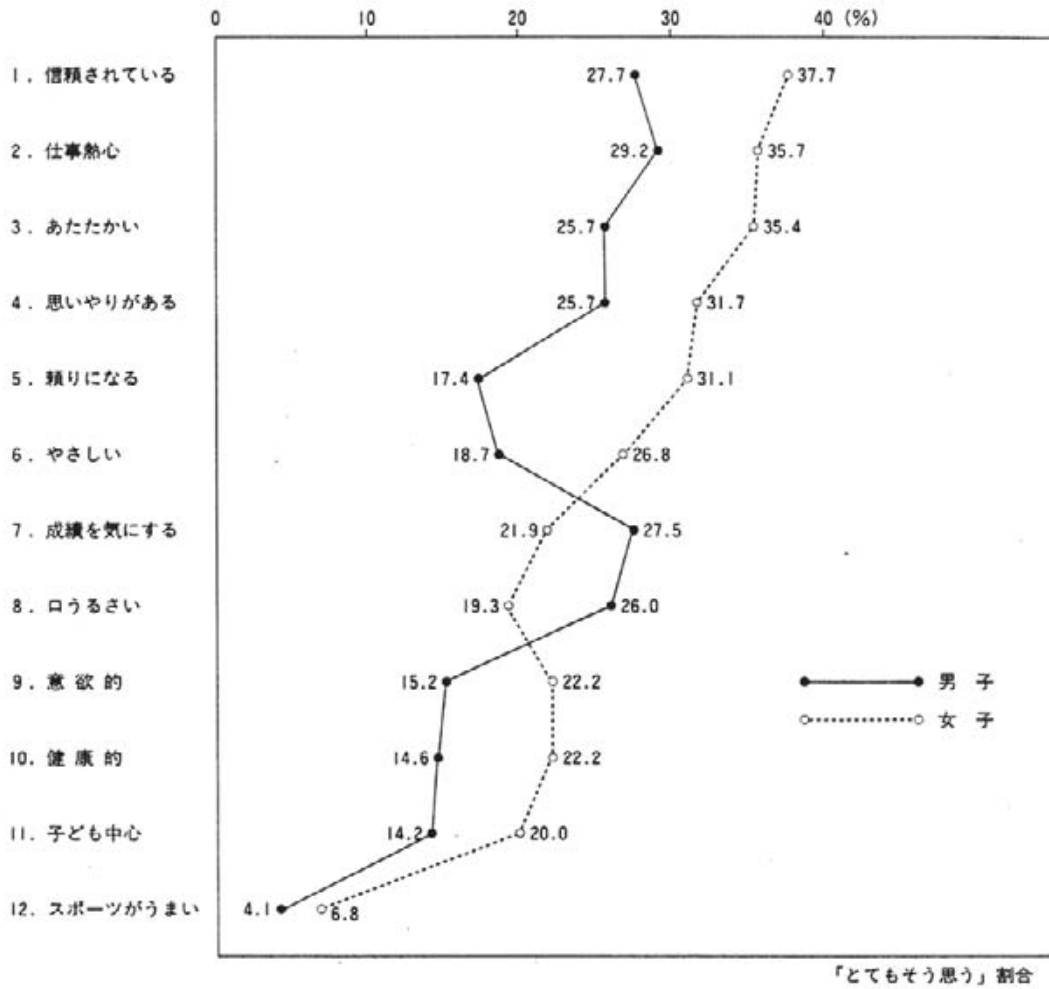


図11 父親と母親のタイプ (子ども)

— 母親はあたたかく思いやりがある —

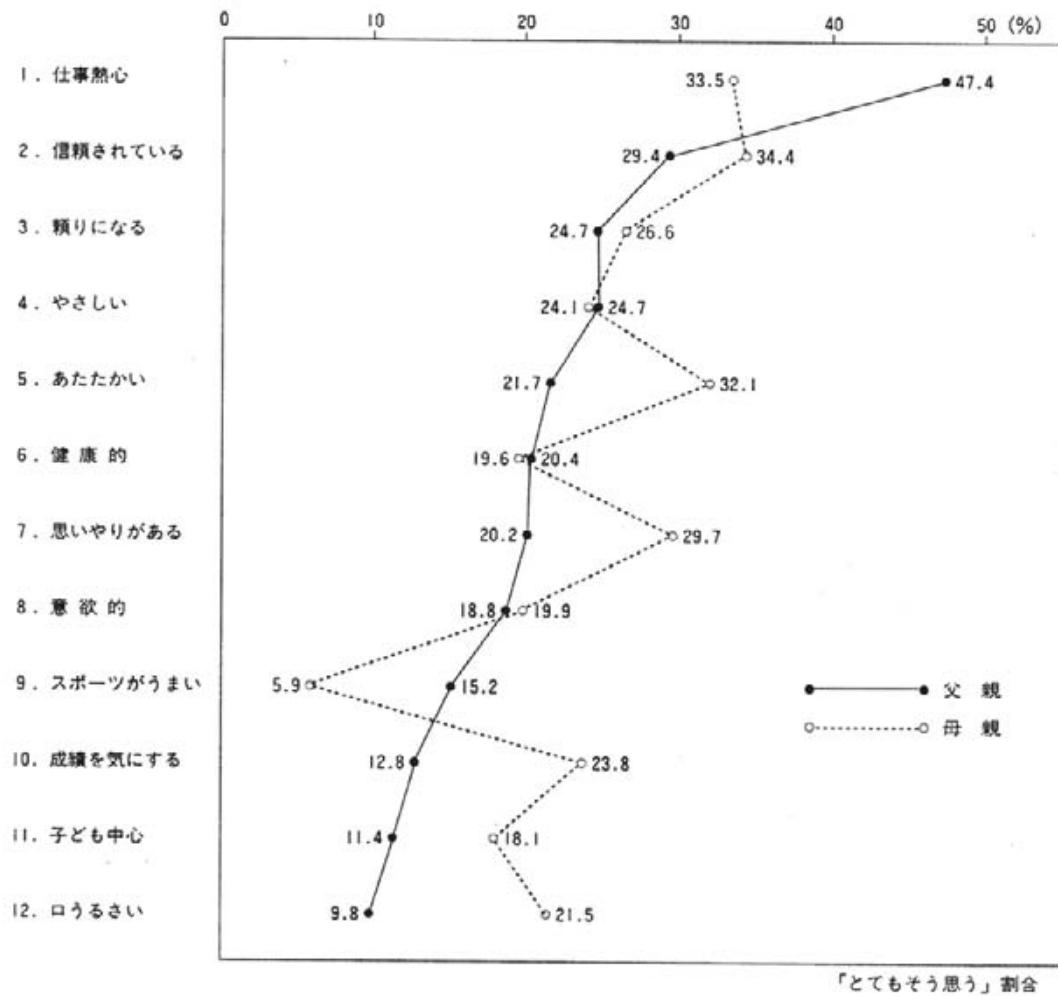


図12 父親のタイプ (子どもと父親)

—ほぼ同じプロフィール—

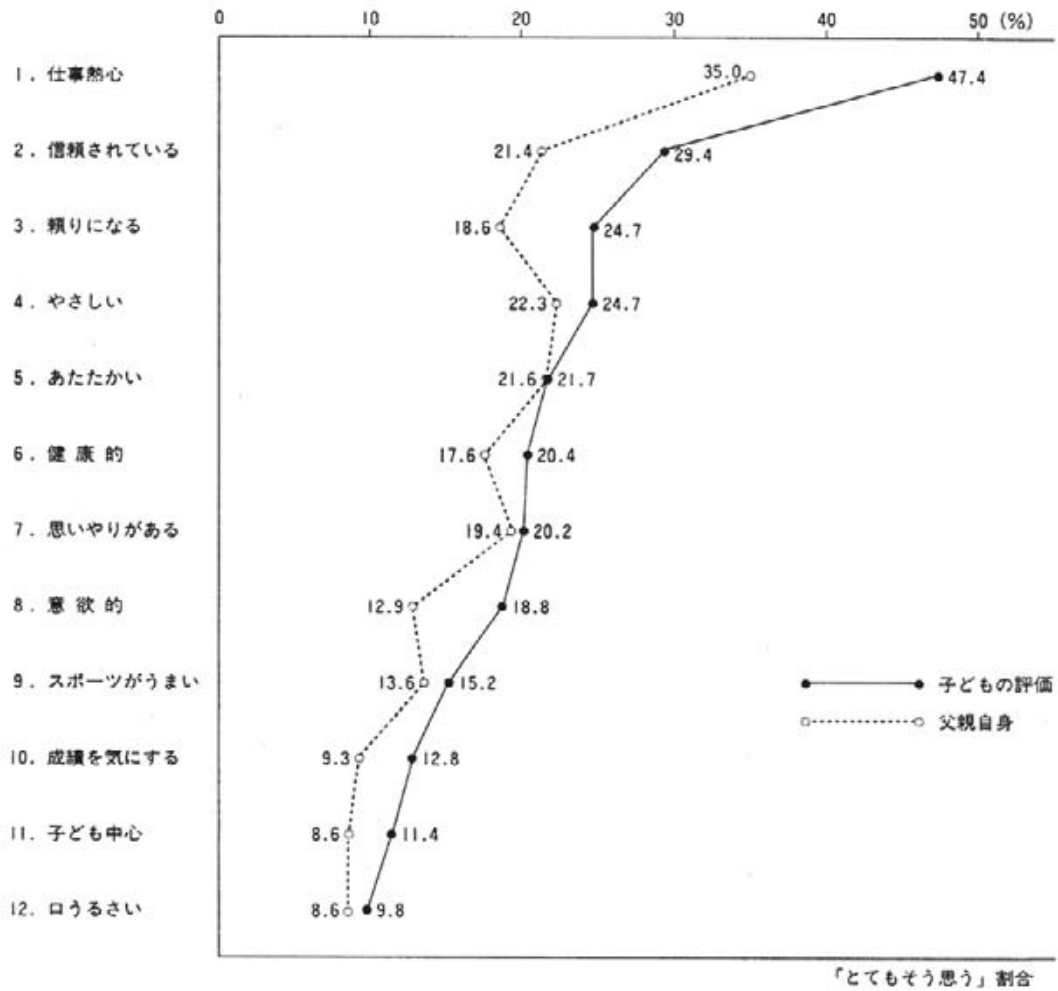
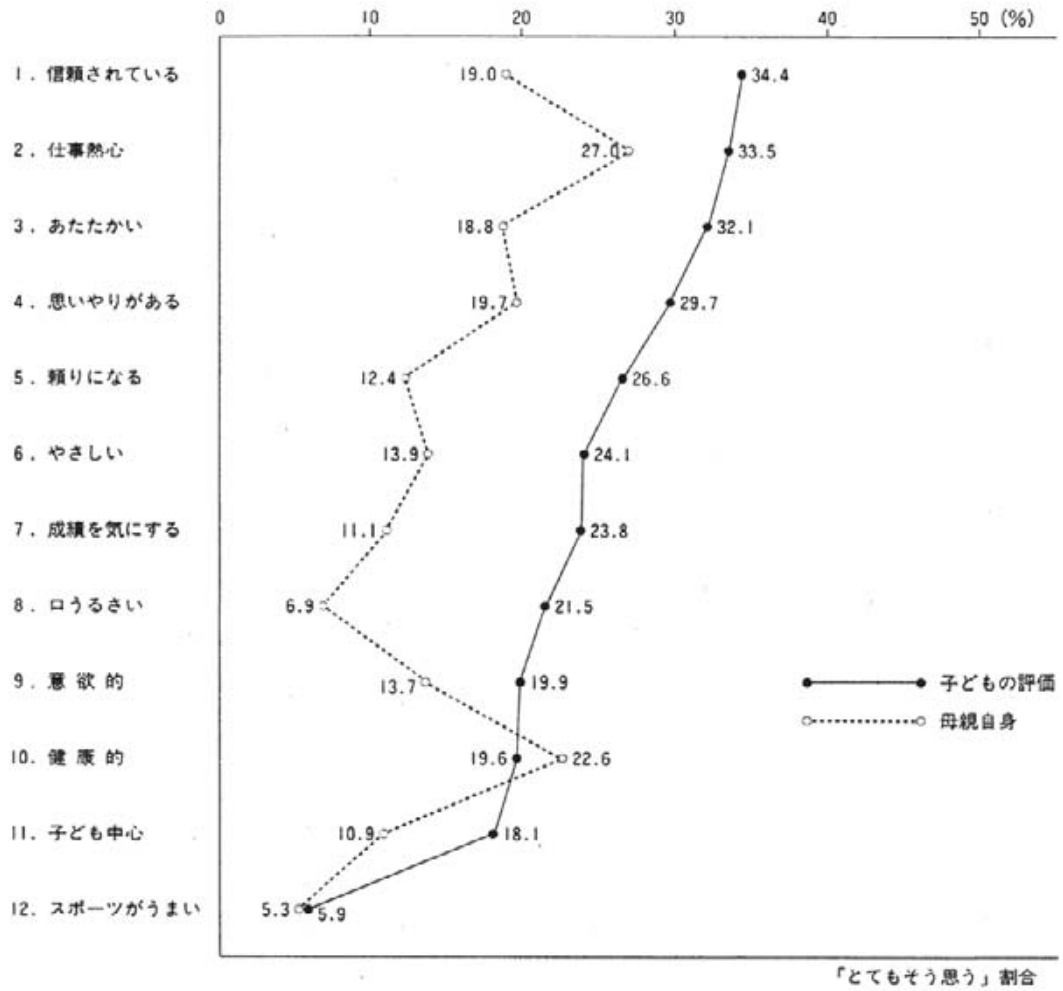


図13 母親のタイプ (子どもと母親)

— かなりの開き —



第Ⅲ章 仲むつまじい親子を支える状況



1. 子どものことを知っているか

これまで触れてきたように、子どもたちは父親、そして母親を、頼りがいがあるかと思われ、それと同時に、父親、母親自身も、親として子どもから頼られているだけでなく、あたたかい親のつもりだと思っている。

子どもサイドからも、親のサイドからも、仲のよい親子の姿が浮かんでくる。もちろん対象が高校生であることを考えると、仲むつまじい親子が望ましいかどうか疑問も残る。しかし、そうした考察はのちにゆずるとして、この章では、仲むつまじい親子関係が、どういう背景から生じているのか、その要因を明らかにしたいと思う。

まず、図14は、子どもたちが、「母親はどれくらい自分のことを知ってくれているか」を示している。さすがに高校生だけあって、母親がすべての面で、「よく知っている」とはいにくいのが、担任の先生の名前や成績、進路などを「かなり知っている」——と子どもたちが思っている——母親が5割を上回る。

そして、「子どものことを知っているか」について、父親と母親たちの反応をまとめると、表2のような数値となる。さすがに、父親は母親ほど子どものことを知っていることはないが、それでも、かなりの項目について、「まあまあ知っている」と答えている。そして、母親たちは、担任の先生の名前を55.0%、学

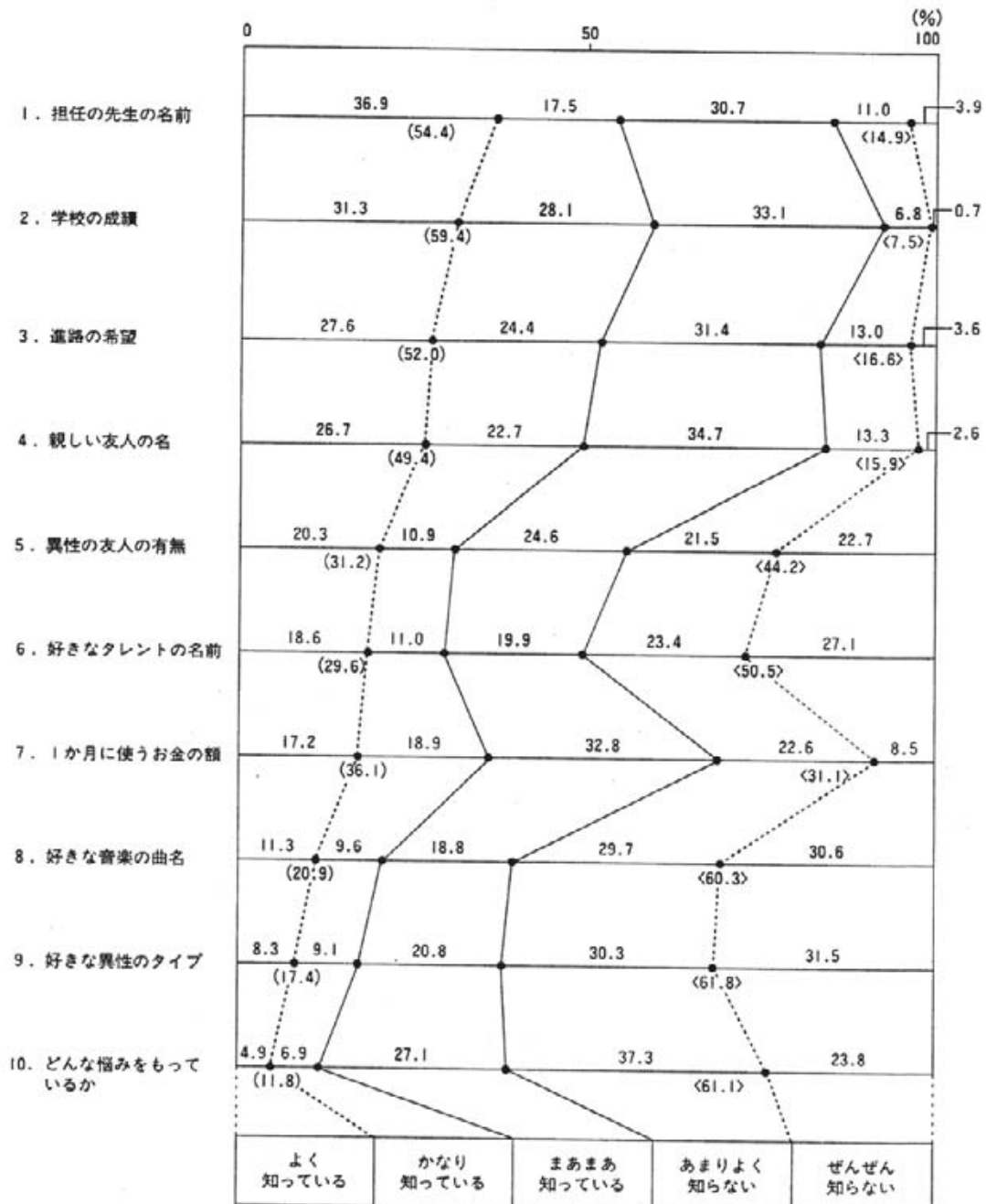
校の成績33.4%のように、「よく知っている」と答えている割合が高い。

そこで、「子どものことを知っているか」に

ついて、母親自身の評価と、子どもの見通しとを対比させてみると、図15となる。図中のプロフィールの示すように、子どもたちが思

図14 母親は知っているか (子ども)

——成績や進路は知っている——



()内は「よく・かなり知っている」割合
 < >内は「あまりよく・ぜんぜん知らない」割合

っている以上に、母親たちは子どものことを知っていると思っている。

好きな異性のタイプや、好きな音楽の曲名

など、くわしいことまではわからないが、子どものことはだいたいのところ理解しているという。

表2 子どものことを知っているか(親)

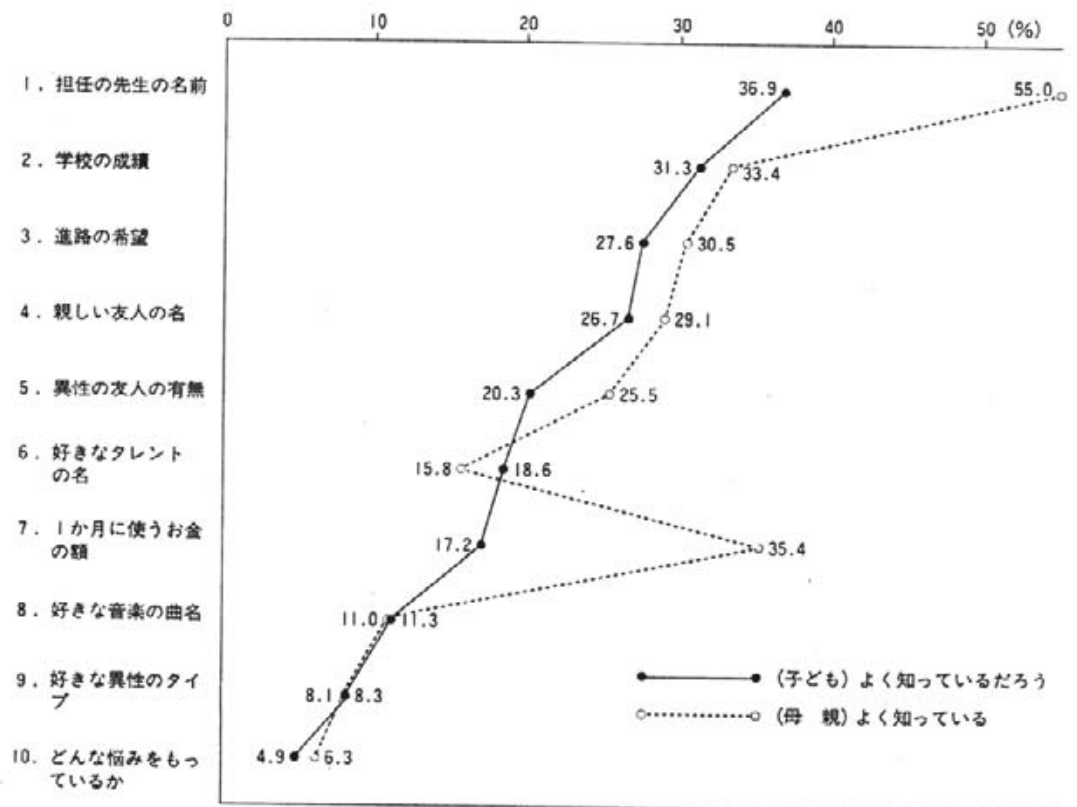
— まあ知っているつもり —

(%)

		知 っ て い る			知 ら な い	
		よ く	か な り	ま あ ま あ	あ ま り	ぜ ん ぜ ん
担任の先生の名前	父 親	22.1	5.7	30.8	22.1	19.3
	母 親	55.0	13.4	23.7	5.7	2.2
学校の成績	父 親	22.9	23.6	42.1	7.1	4.3
	母 親	33.4	25.5	34.9	5.0	1.2
進路の希望	父 親	23.2	26.1	42.1	7.2	1.4
	母 親	30.5	24.1	38.1	6.6	0.7
親しい友人の名前	父 親	12.9	14.3	42.1	24.3	6.4
	母 親	29.1	23.8	36.3	9.2	1.6
異性の友人の有無	父 親	9.4	5.8	20.3	31.9	32.6
	母 親	25.5	9.9	27.0	20.1	17.5
好きなタレントの名前	父 親	10.1	3.6	25.2	37.4	23.7
	母 親	15.8	11.7	33.3	28.4	10.8
1か月に使うお金の額	父 親	17.9	17.9	38.5	17.1	8.6
	母 親	35.4	25.9	30.0	7.2	1.5
好きな音楽の曲名	父 親	6.4	10.0	24.3	34.3	25.0
	母 親	11.0	12.2	34.0	33.1	9.7
好きな異性のタイプ	父 親	2.9	6.5	20.3	37.0	33.3
	母 親	8.1	11.0	31.3	35.4	14.2
どんな悩みをもっているか	父 親	1.4	4.3	34.3	40.7	19.3
	母 親	6.3	11.7	43.8	30.1	8.1

図15 知っているか（子どもと母親）

——母親は知っているつもり——



2. いつまで子どもを注意するか

高校生の親子の間で、たがいに知り合っていることがよいかどうかは疑問が残る。子どもが自分の世界を作るようになれば、子どもが親の知らない世界をもつようになるのが当然であろう。

したがって、高校生の親子の場合、親が子どものことを、もう少し知らなくてもよいようにも思う。しかし、現代の母親たちは、予想される以上に、子どものことをわかってきた。

高校生というより、小中学生の親子関係という感じがしないでもないが、そうした傾向は図16にも認められる。

日常生活の中で、「どれくらい親から注意されるか」を図16に示した。「いつも」とはいわれないものの、「かなり」「朝起こされる」、あるいは「部屋の掃除をしなさい」などと言われる子どもが3割を超える。

そして、母親たちが、子どもをどれくらい注意しているかについては、表3のように、現在でも注意しているという。

現在注意している	{	1. 部屋の掃除
		2. 長電話
		3. 朝起こす
高卒まで注意する	{	1. バイク
		2. 異性とのつきあい
		3. 夜ふかし
		4. 外出先の連絡

おとなになっても {

1. 喫煙
2. 飲酒

こうみえてくと、確かにそれなりに注意しなければならぬのはわかる。しかし、夜ふかしから外出先の連絡などといっていると、親たちもいっているように、子どもが高校を卒業する頃になっても、子どもに注意することが必要になる。

このように子どもがいくつになっても、子どものことをよく知っていて、子どもに注意を与えつつ、子どもを大事に育てるのが、現代の親子関係かもしれない。

そして図17のように、子どもも親から今でも注意されていると答え、親も、子どもを注意しているという。おとなになるまでに、いろいろなアドバイスが必要なのが、現代の成長の過程なのかもしれないと思いつつも、なにやら割り切れない感じがする。

なお、子どもたちは図18のように、中学を卒業するまでに生活習慣を確立したと思っており、それほど注意されることはないと答えているが、実際は、現在もなお注意を受けているのは、すでに触れたとおりである。

図16 注意されているか (子ども)

—— 朝起こす、部屋の掃除 ——

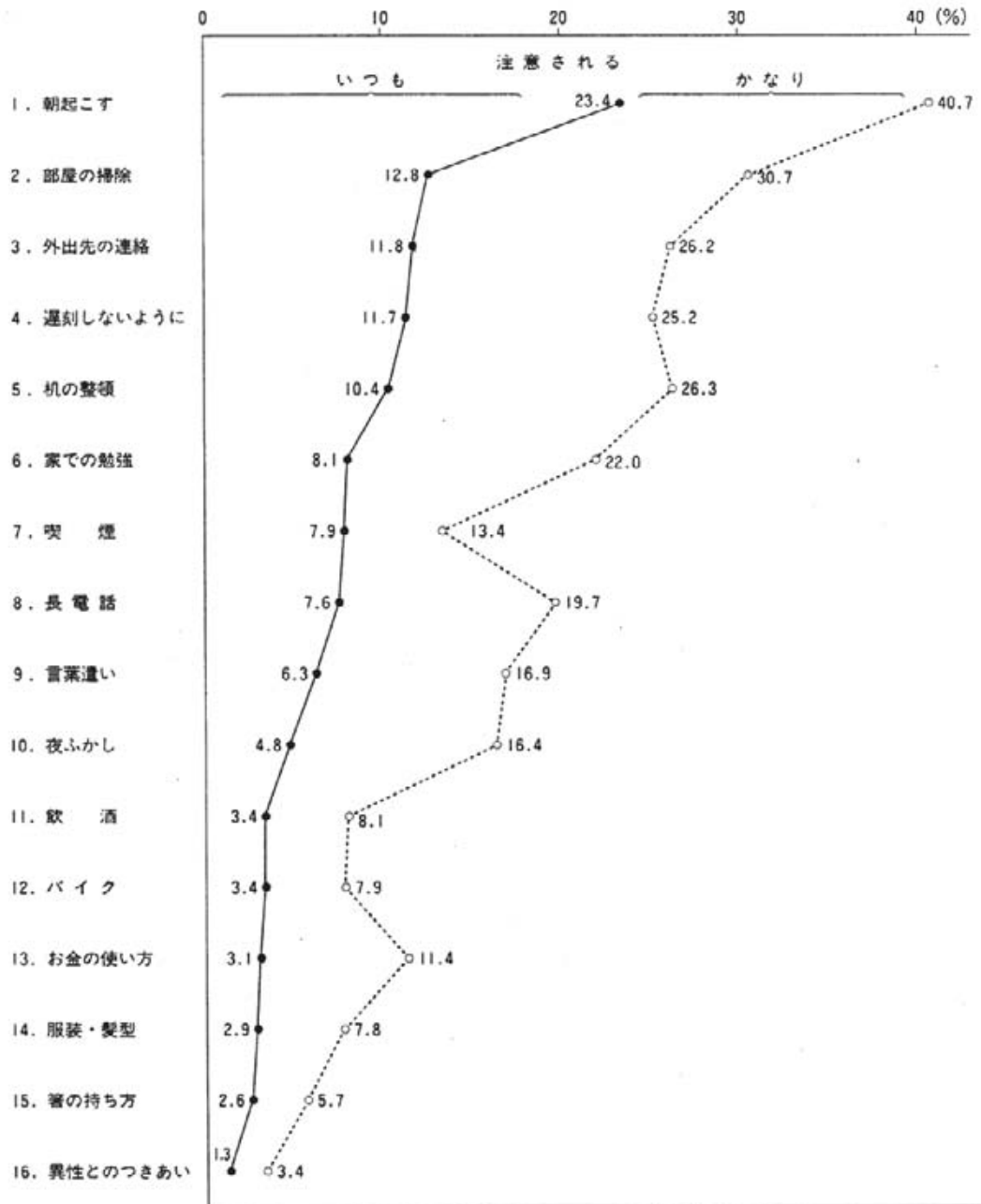


表3 いつまで注意しているか（母親）

— 現在、そして将来も —

(%)

	小3まで	小卒まで	中1まで	中卒まで	現 在	高卒まで	おとなになるまで
1. 異性とのつきあい	4.4	1.1 (5.5)	1.5 (7.0)	7.5 (14.5)	15.4 (29.9)	37.6 (67.5)	32.5 (100.0)
2. 夜ふかし	4.4	5.6 (10.0)	4.6 (14.6)	11.2 (25.8)	26.4 (52.2)	35.7 (87.9)	12.1 (100.0)
3. 外出先の連絡	5.7	5.6 (11.3)	3.7 (15.0)	6.1 (21.1)	26.1 (47.2)	29.7 (76.9)	23.1 (100.0)
4. 飲 酒	6.1	1.4 (7.5)	1.3 (8.8)	3.4 (12.2)	14.6 (26.8)	35.1 (61.9)	38.1 (100.0)
5. 喫 煙	6.3	1.3 (7.6)	1.2 (8.8)	3.8 (12.6)	13.2 (25.8)	27.5 (53.3)	46.7 (100.0)
6. 家での勉強	6.4	8.9 (15.3)	9.2 (24.5)	21.8 (46.3)	24.6 (70.9)	28.2 (99.1)	0.9 (100.0)
7. お金の使い方	7.5	7.8 (15.3)	5.8 (21.1)	13.5 (34.6)	19.5 (54.1)	28.1 (82.2)	17.8 (100.0)
8. バイク	7.9	1.4 (9.3)	2.4 (11.7)	3.7 (15.4)	19.0 (34.4)	47.6 (82.0)	18.0 (100.0)
9. 部屋の掃除	8.9	10.5 (19.4)	6.4 (25.8)	9.6 (35.4)	36.9 (72.3)	19.5 (91.8)	8.2 (100.0)
10. 朝起こす	9.5	6.6 (16.1)	4.7 (20.8)	11.2 (32.0)	36.4 (68.4)	27.7 (96.1)	3.9 (100.0)
11. 長電話	10.0	3.5 (13.5)	3.6 (17.1)	12.3 (29.4)	36.6 (66.0)	25.6 (91.6)	8.4 (100.0)
12. 音楽遊び	10.7	10.5 (21.2)	5.9 (27.1)	12.9 (40.0)	29.5 (69.5)	16.2 (85.7)	14.3 (100.0)
13. 服装・髪型	13.2	6.6 (19.8)	7.2 (27.0)	17.4 (44.4)	27.8 (72.2)	23.2 (95.4)	4.6 (100.0)
14. 机の整理	15.4	13.4 (28.8)	7.4 (36.2)	11.6 (47.8)	28.6 (76.4)	20.6 (97.0)	3.0 (100.0)
15. 遅刻しないように	20.5	7.9 (28.4)	3.8 (32.2)	11.7 (43.9)	27.9 (71.8)	24.5 (96.3)	3.7 (100.0)
16. 物の持ち方	57.3	14.3 (71.6)	4.4 (76.0)	4.4 (80.4)	12.1 (92.5)	3.8 (96.3)	3.7 (100.0)

○ = 最頻値

図17 注意しているか (子どもと母親)

—— 外出先などは注意している ——

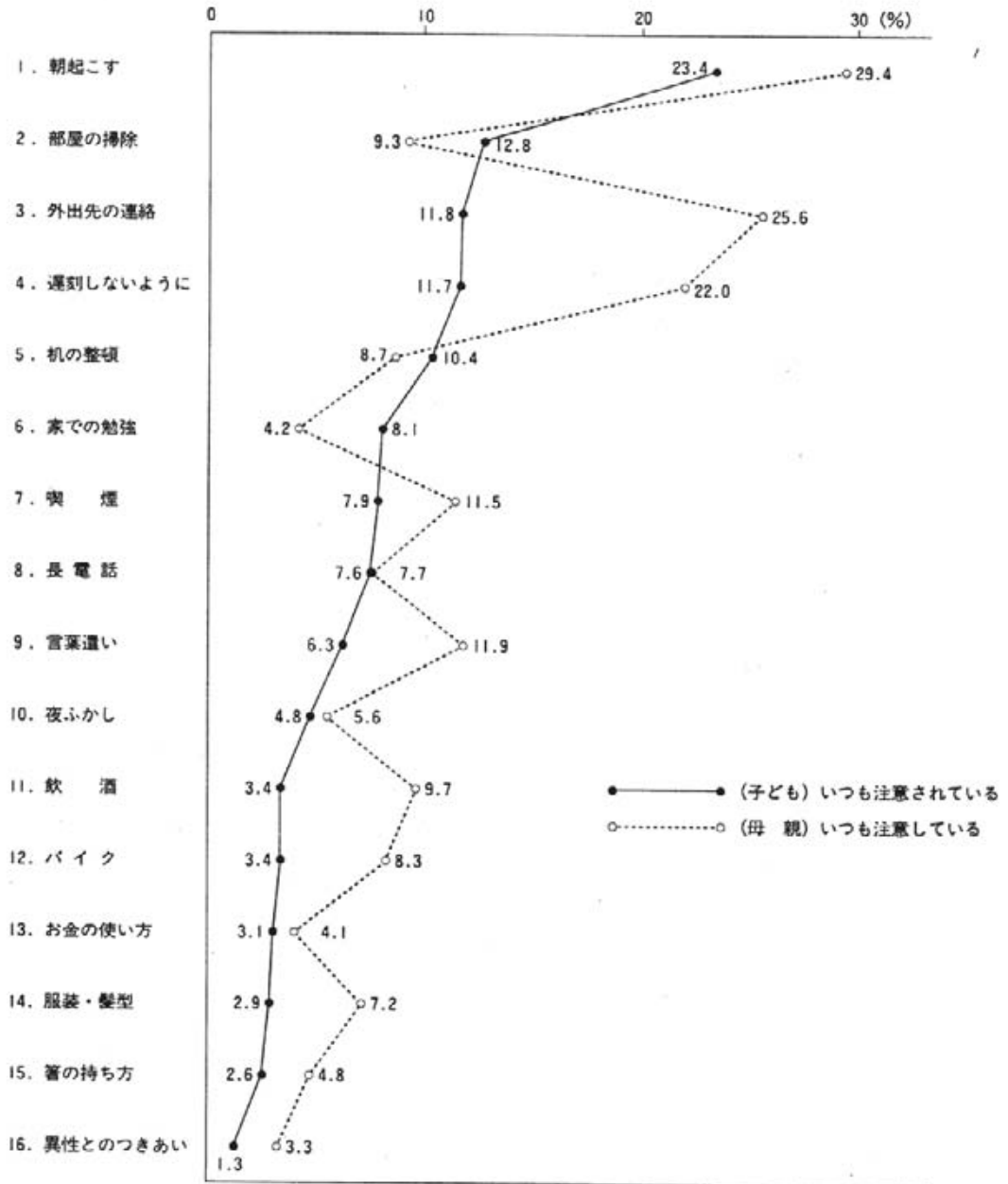
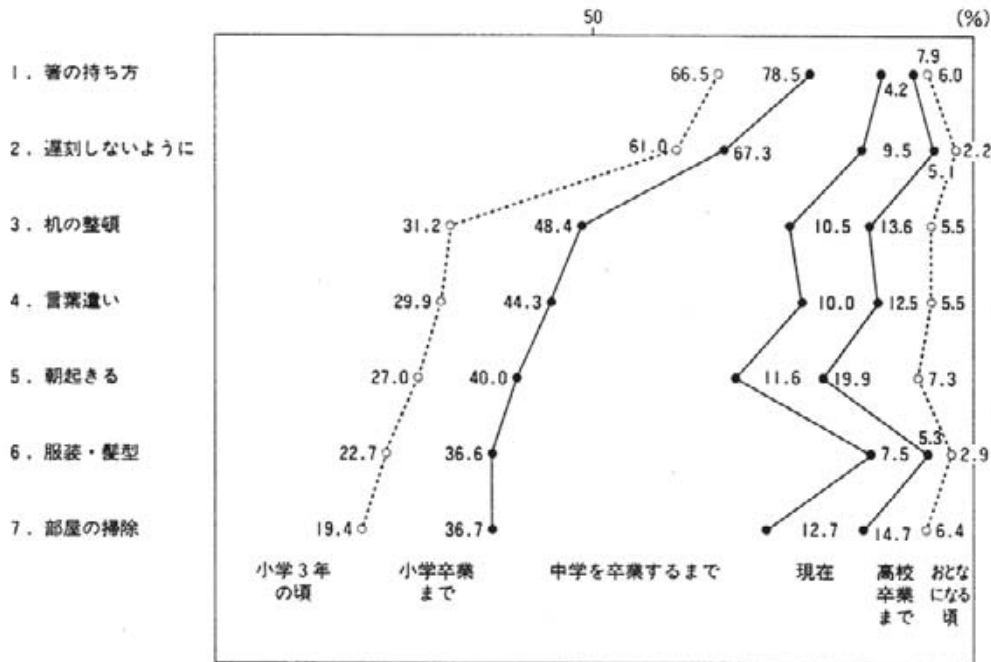


図18 生活習慣の自立

——かなり自立している——



3. 親との関係はうまくいっているか

このように、高校生の親子関係というにしては幼い親子の姿が明らかになってきたが、それでは親子関係はうまくいっているのか。

表4のように、「とても」の26.8%に、「かなり」の34.6%を含めると、61.4%と6割を超える子どもが、「親とうまくいっている」と答えている。

そして、図19によれば、親との関係は子どもの頃もうまくいっていたが、中学の頃少し下がったものの、現在はうまくいっている。そして、これから先もずっとうまくいくだろうという。

親子がうまくいっているというのは、子どもサイドの反応だけでなく、親も子どもとの関係がうまくいっていると答えている。表5によると、「とても」に「かなり」を加えると、父親の60.4%、母親の65.8%が、子どもとの関係がうまくいっていると思っている。

したがって、子どもと、そして親たちも、親子関係がうまくいっていると答えているが、図20に示したとおり、「うまくいっている」割合は、子どもから見ても、親から見ても、ほとんど変わっていない。それだけ、親子の間が仲むつまじいのであろう。

表4 親とうまくやっているか (子ども)

— うまくいっている —

(%)

	うまくいっている			うまくいっていない			
	とても	かなり	やや	やや	かなり	ぜんぜん	
全 体	26.8	34.6	29.7	5.8	1.9	1.2	
学 年	1 年	35.1	31.5	26.4	4.4	1.2	1.4
	2 年	22.0	37.1	30.8	6.4	2.4	1.3
	3 年	27.8	31.4	32.1	7.2	1.0	0.5
性 別	男 子	23.8	30.8	34.0	7.7	2.0	1.7
	女 子	28.3	36.5	27.5	4.9	1.8	1.0
通 所	むすかしい大学	29.2	37.0	26.3	5.1	1.4	1.0
	まあまの大学	24.9	34.3	31.9	5.9	1.9	1.1
	短 大	33.2	30.9	24.7	6.2	2.5	2.5
	専門学校	21.8	32.7	34.6	7.3	1.8	1.8

図19 親との関係 (子ども)

— 全体としてうまくいっている —

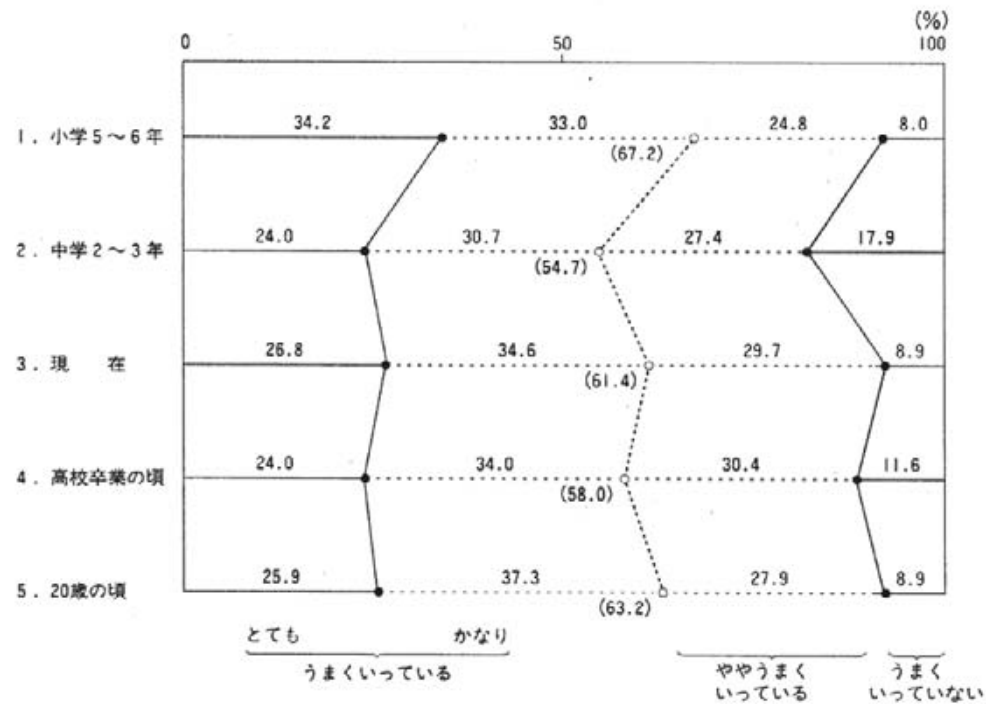


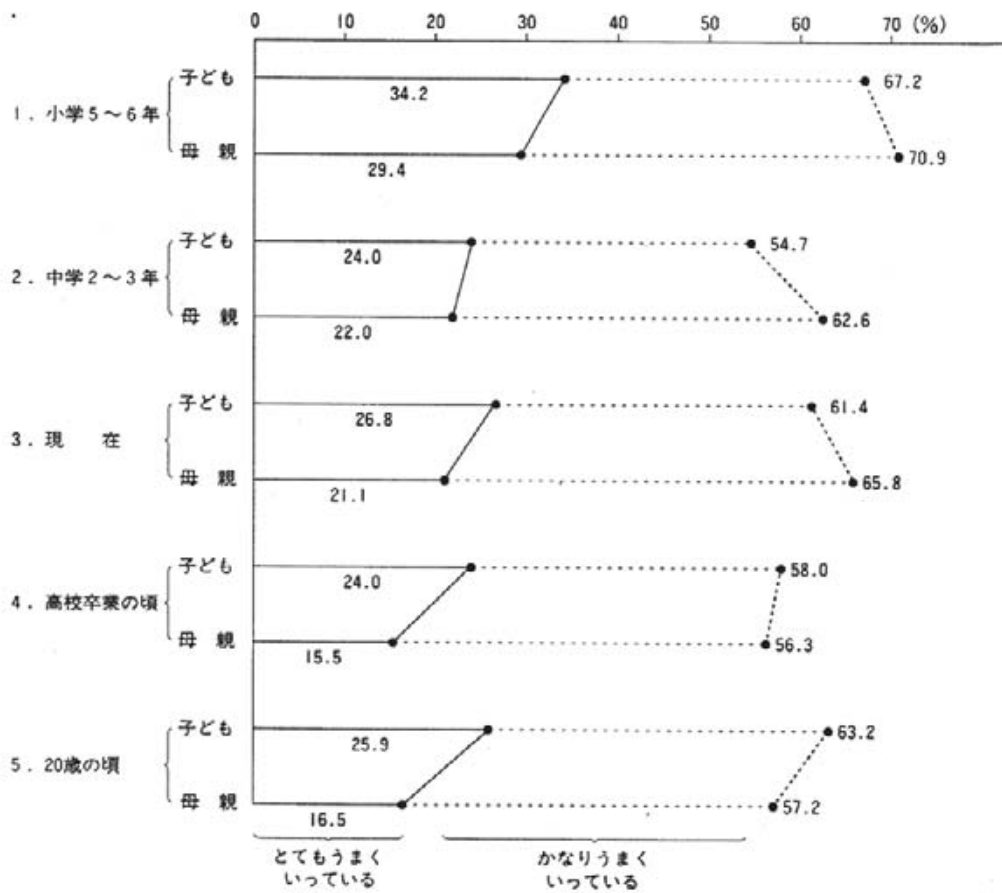
表5 子どもとうまくいっているか（親）

——かなりうまくいっている——

	（%）					
	うまくいっている			うまくいっていない		
	とても	かなり	やや	やや	かなり	ぜんぜん
父親	22.3	38.1	36.0	2.2	1.4	0.0
母親	21.1	44.7	31.5	1.9	0.6	0.2
子どもの 年齢の 別	小学	25.9	44.8	25.9	3.4	0.0
	高校	20.3	43.9	34.0	1.1	0.2
	大学	20.1	41.3	34.8	2.2	1.1
	20歳	13.9	47.2	33.3	3.7	1.9

図20 親子関係はうまくいっているか

——親子のずれは少ない——



4. 異性とのつきあい方

親子の間が円満で、子どものことを親はよくわかっている。その限りではほほえましい状況だが、これから先、子どもが成長していても、こうした状況が続くのであろうか。

先の図17では、これから先、子どもが成長するにつれて、注意するのは異性とのつきあい方であった。もちろん図21のように、子どもたちは異性とのつきあいは、日記の交換や電話でのおしゃべりなど、好ましいと思っている。それに対し、表6によれば、親たちは、異性とのつきあいは、誕生日のプレゼントか日記の交換くらいで、それ以上に進んでしまうのは好ましくないという。

これまで親子のデータは、ほとんど同じプロフィールを描いていたが、異性とのつきあいについては、子どもが肯定的、親が否定的という差が目についた。

もちろん子どもたちは、親が異性とのつきあいに否定的なことはわかっている(図22)。そこで、子ども自身の気持ちと、親がどう思っていると思うか、さらに、親自身の気持ちとをひとつにまとめてみると、図23のようになる。子どもたちが、親の気持ちをそれなりに理解していることを、プロフィールの中からつかむことができよう。

図21 異性とのつきあい(子ども)

——好ましいと思う——

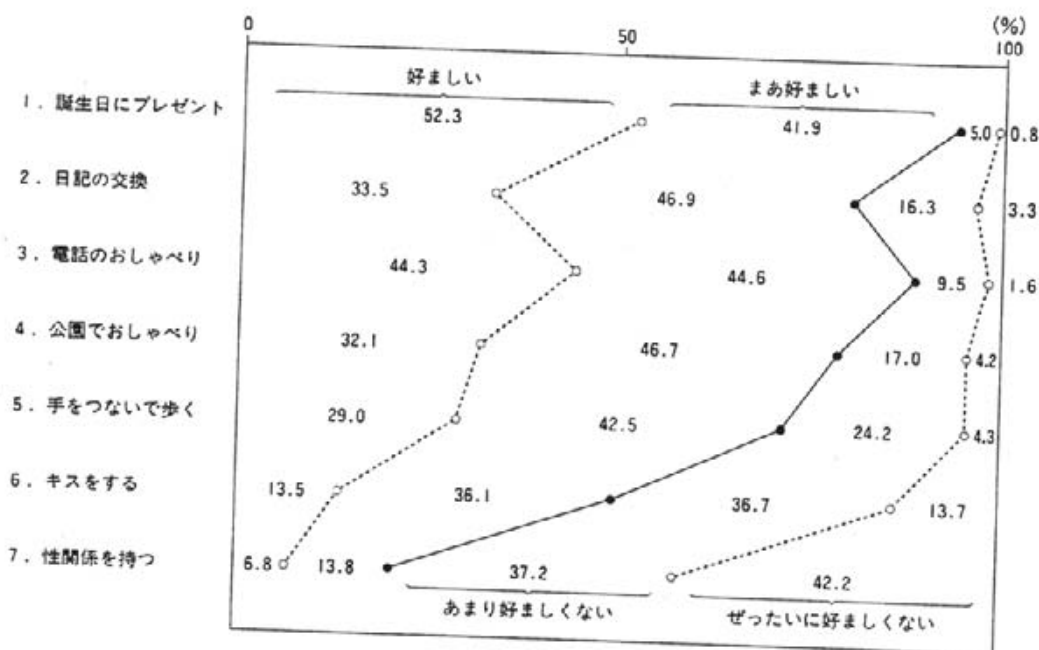


表6 異性とのつきあい(親)

—日記の交換くらいまで—

(%)

	16.3	51.1	29.6	3.0
	13.2	54.2	29.3	3.3
	12.6	47.4	36.3	3.7
	9.7	41.6	44.5	4.2
	5.8	44.5	46.8	2.9
	7.9	50.2	38.5	3.4
	3.6	13.9	62.8	19.7
	1.4	11.6	56.2	30.8
	6.7	17.9	50.0	25.4
	3.0	16.2	52.9	27.9
	0.0	3.7	40.0	56.3
	0.3	2.0	30.6	67.1
	0.0	0.0	18.7	81.3
	0.2	0.5	9.4	89.9

図22 異性とのつきあいを母親はどう思うか

—おしゃべりくらいは好ましい—

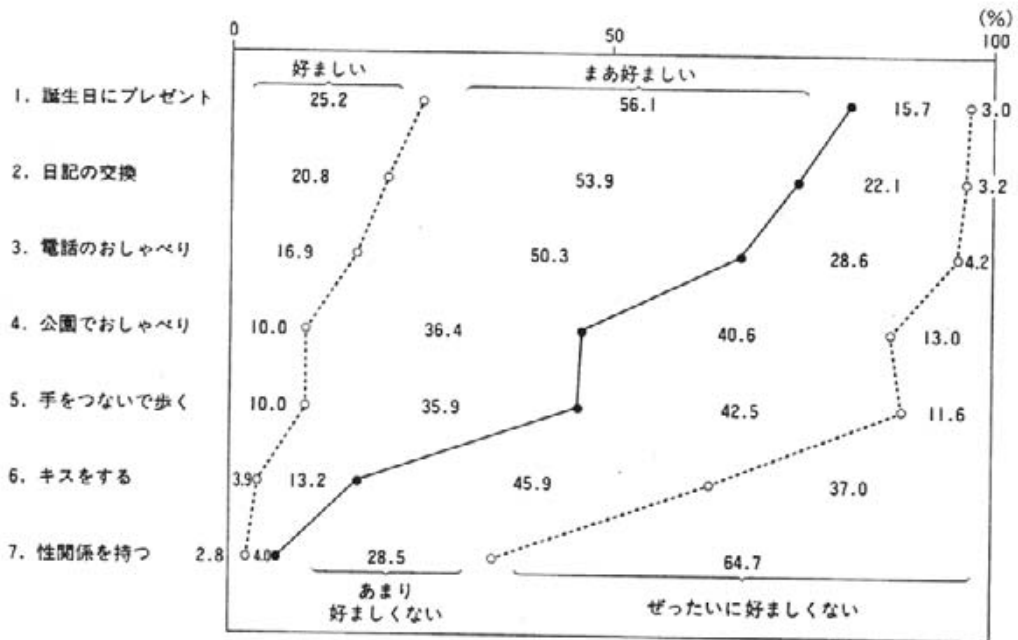


図23 異性とのつきあい (母親と子ども)

—母親は厳しい見方—

